

『新潟県社会科教室』1964年5月(東京書籍)

社会科を前進させるために

矢 口 新

(一) おぼえる教育のあやまり

社会科を前進させるなどということはこれまで何回となく使われた言葉だが、実際にはなかなか前進どころではなかったのである。何が前進なのかもよくわからないような気もする。しかし現在われわれがやっていることを反省してみることはできるし、そこには誤ったことをやっているのではないかと考えられることが多く目につく。その誤りをはっきりと認めることは前進につながることもかもしれない。しかし一人や二人が誤りを認めても、多くの人が謝りを認めなければ、なかなか前進にまでは至らないことが多い。前進などということは、多くの人々の協力がなければならないことが多い。所が、多くの人々は今自分がやっていることを卒直に誤りとして認めることはしないものである。人は本来保守的なものである。

六年生に世界の国々について教える単元がある。私は教科書を書いている一人だが、正直の所、その教科書に書いていることをおぼえていない。どの一つの国をとっても、よくおぼえていない。たかが小学校の六年生だというなかれである。中国の人口がどうで、地勢がどうで、気候がどう、産業がどう、産物はどうと書かれても、何一つ満足に答えられない。そもそもそれを書く時からして、参考書をひもときながら書いたのである。

所が、それが書かれて教科書になると、児童たちにどういふものとして与えられるであろうか。教師の方がそもそもそれを児童におぼえておくようにと

いう態度なのである。そればかりではない。教師は教科書を見てそれ以上にいろいろなことを付け加える。そうしてそれをおぼえることを児童に期待する。

卒直に言って私はそんなことをおぼえても仕方がないと思う。自分がおぼえていないから我田引水をしているのだと言われても仕方がないが、しかしそんなことを知らなくても結構世の中をわたっていくのに不自由しないのである。正直の話たとえば中国の人口はと聞かれても、はっきり答えられない。けれども不自由はないのである。それをはっきりと問題にするときは、年鑑かなにかを見る。それで事足りてきている。

私は自分が理解する能力がないせい、あの教科書に書かれてあることをおぼえるのは無理だと思う。子供にそんなことさせるのは無理だし、従って無駄骨をおっていることだと思う。たとえ今一寸の間にそれをおぼえたとしても、すぐ忘れるのだと思う。試みに多くの大人に聞いてみても、そんなことをおぼえていないのではないかと思う。よく知っているのは教師だけではないだろうか。それは商売だから知っているのである。しかし教師だって、他の単元を教えている時に急に世界の国々のことを聞かれたら、答えられないことが多くあるのではないか。

こんなこと言うのは、教科書というものがあって、それを使って教育をしているという場合におかれていながら、何か教育について間違った考え方が生れて来て知らず知らずの中に錯覚に陥っているのではないか。書かれてあることをおぼえるものだという事はもう疑ってみることもない程、大前提になっ

ている。そして何事をやるにもその上に立ってやっている。所がその大前提が実は問題なのではないか。それはもう当り前のことで反省するなどということは考えたこともないことなのだが、それがそもそも間違いのもとではないだろうか。知っているということは教育された人間ということであり、それ程知るとかおぼえるとかが大切というか、当り前というか、そうなることが教育の目標だと考えられている、いな考えている以前の自明のことになっているのだが、それが間違いのもとでないか。

曾って教科書学習ということに強い反省がなされたけれども、それもいつの間にやら消えてなくなった。やっぱり教科書を教えている。この時もいろいろなことはいわれたが、結局、書いてあることをおぼえさせるのではないのだということであった。しかし一番大切な所がわからずじまいで、教科書という教育の材料をけざらいしているかのように受けとられてしまった。そして教科書をおぼえさせないことが、それにかわって、教師が話したことをおぼえるということになったにすぎない。それは明瞭に教師の負けである。教科書をおぼえた方がよいということになるのは当然である。つまり教育とは、何かをおぼえさせることだということが抜けないから、そういう考えなら行きつく所は教科書をおぼえるということになるより他ないのである。教師のしゃべったことなどは、あやふやで、おぼえられはしない。

知っているとか、おぼえているなどということは、教育の目標にするに足りないことなのだが、知らなくともよいなどと聞くと、人はきまって動揺するであろう。知らなくともいい筈がないのではないか、知っていることは、やっぱり大事さといわれると安心するのである。そういう感情の習慣がある。これがくせものである。この感情は長い間の伝統で培われてきたものである。これが本当の考え方を圧倒して、恰も無理であるかのようにわれわれに訴えているのである。ついこの間まで地理や歴史やそういうものを暗記して教育を受け、おぼえて来たので一人

前になったというような伝統が、われわれに本当のことをわからせないようにしてしまっている。これを打破するということはむつかしいことである。

(二) 考えるということ

世界の国々の単元にもどるが、私は一つの国々のことについては、殆んどおぼえていないが、それではどうして、教科書が書けるか。全然何もわからなくては、これは書ける筈がない。書く場合、私がもっている武器は何かということ、国の広さはどうか、人はどうか、地勢はどうか、産業はどうか、産業の中でも農業はどうか、工業はどうか、それと自然条件の関係はどうかなどといったことである。いわば国を見ていく場合の視点とも言うべきものであろう。

これらの事柄の何はどうかということの内容はよく知らないが、そういうことを問題にすれば、その国のことがわかってくるという見方はもっている。その見方をもっているから、その見方で統計をみたり、地図をみたり、写真をみたりして、これはどうということがわかって来る。その判断を文として表現する。それは忘れてしまうけれども、まだ材料をみれば考えることはできる。忘れてしまってもよいのであって、中味になっている人口がいくらとか、どの産業がどうだとかいうことは、刻々かわっているので、若しおぼえていて忘れないとしたらかえってまちがいをおぼえておくことになる。子供の頃は記憶力が強いというが、若しそれを十年も持ちつづけたら、大人になった時は、昔のことをおぼえていて、それでかえってまちがったことを本当のことのようになっていることになる。それがかえって人間が新しい世の中に役に立たなくなる原因ともなるのである。

こう考えると、また我田引水といわれそうだが、私は「子供におぼえさせることは物の見方であって、その見方でみた結果のかすではないのだ」ということを主張したい。つまり世界の国々を問題にするなら、それぞれの国について、何と何を問題にして行

くか、その材料をみて、この国にこの点はこう、この点はどうというように判断してゆく、また次の国についてもそうやってみてみる。そういう二つを比較すると、この点はこちらがよい、この点はおなじだ、などということを考えて行く。そういう考える筋道は、われわれが自分でもっていきなくてはならないのである。それを人間にもたせるようにするのが教育ということである。

(三) 前進のむつかしさ

さてそこまでのことについては納得して下さる人もいると思うが、問題はむしろそれからさきにある。そういうことを自分も考えてやっているつもりだという人は多いかも知れないが、つもりでは、なかなか本当にそういう教育にはならないのである。これまでの教育の仕方が、全体としておぼえる授業になっているので、その全体の形をかえてゆかなくてはならないのである。それには大変な努力がいる。

世界の国々という単元の例でいえば、まず教科書が今のようなものではだめなのである。考えたかすが書いてあるのではなく、考えるもとになるもの、材料が出ていなくてはならぬ。今の教科書はそうになっていないから、今の教科書で授業するとすれば、教師がうんと沢山のものを補う必要がおこってくる。教科書にも多少は書かれているが、それだけでは足りないのである。将来は教科書がかわらなくてはならないのである。しかし教科書をかえるのは、実は、教師による実践が先になくなくてはならない。こういう授業をするために、こういう教科書ではなくてはな

らぬといわれるべきものである。そこに、今の教科書を使用しつつ、教師がこれを補って、前進した授業をやって行くという大変な努力が必要になってくる。しかし教師は教科書にしたがって授業をやっているというのが一般の状況であるから、そうなると、教科書がかわらなければ、前進した授業が行われないうという理論が出て来る。鶏と卵のような問題だが、結局、前進させる営みは鶏がするべきなのかという問題に帰着する。自ら進む教師が、待っている教師が、それがわれわれの社会を前進させることにもなるだろう。最後に教師の人生観の問題ともなるのである。

社会科の前進の問題をきわめて具体化的に、したがって、ほんの一寸した片鱗だけでも取扱って考えてみても、結局はこういう問題にぶつかるのである。社会科を前進させることがいかにむつかしいかということでもある。だから前進、前進といわれても、実は後退の方が目立つという理由もあると言える。結局われわれの実践力が過去数十年の間におとろえて来ていることかもしれない。

さてほんの一寸、入り口の所までいって、それで紙面がなくなってしまったが、問題は沢山ある。たとえば物の見方を養うための子供の訓練の仕方はどうなのか、今迄の授業のように、通りいっぺんの話合いや教師の話で、子供が自分のものとして見方を身につけるであろうか。そこに新しい授業のプログラムが考えられなければならない。これも大変な仕事だが、前進とはそういうものであろう。今われわれは惰性の上にあるという反省が必要であろう。